◎特集 宇都宮再発見

歩いて知る・見る・感じる、宇都宮の魅力！

歴史を知れば、もっとおもしろい〈宮〉の街なみ

宇都宮の歴史をご存知ですか？　二荒山神社や宇都宮城は知っていても、わが街の歴史は案外知らないもの。

でも、実は古い歴史の中に、今の〈宮〉の魅力が隠れているのです。今回の特集では、城址公園から、復興なった慈光寺赤門までを歩いてたどりながら、宇都宮の魅力を再発見しました。

「宇都宮の歴史を歩いてみよう」が今回の特集のテーマ。といって、ただ歩くだけでは歴史に触れることはできません。ここはやはり、宇都宮に詳しいガイド役をどなたかにお願いしなくては――ということで、ご登場いただいたのが、この方たちです。

◎塙　静夫さん
栃木県考古学会会長で、栃木県の考古学・歴史の第一人者。専門書から『うつのみや歴史探訪』などガイドブックまで、著書多数。

◎大貫　裕さん
うつのみやシティガイド協会会長として、宇都宮観光案内ボランティアの中核を担っている方です。演劇で鍛えた声と語り口が人気です。

◎福田　泰子さん
宇都宮を代表する老舗ホテルのひとつ、ホテル丸治常務取締役。当所女性部副会長でもあります。今回は宮っ子代表としてご参加いただきました。

今回歩いていただいた大貫さん（左）・塙さん（中央）福田さん（右）。

塙さんをガイド役に、大貫さん・福田さんと三人で、歴史探訪をしていただきました。

さっそくスタートしたいのですが、その前に少し堅めのお話を――。

今年10月、観光庁という政府機関が発足したことは、ニュースなどでご存知でしょう。これは、日本全体として「観光立国」を推進するために設立されたものです。

日本は世界中からお客様をお迎えしている、観光大国です。以前は欧米からのお客様が多かったのですが、近年は韓国や中国、台湾、東南アジアからいらっしゃる方も目立つようになりました。

この現状に対して、日本の〈観光力〉をアップさせ、観光客の誘致を推進しようというのが、観光庁設立の目的です。

こうした国の方針は、商工会議所としても以前から国に要望していたもので、日本商工会議所では毎年のように観光振興施策についての要望を政府に提出していました。

もちろん、それと同時に各商工会議所では、独自の観光事業を行ってきました。当所でも、餃子やジャズによるまちづくりに取り組んできましたが、これらは集客交流を図ることで文化や商工の振興に繋げるとともに、観光振興としての役割も果たしています。

観光振興で重要なのは、観光資源の発掘です。歴史や文化など、宇都宮の魅力を再発見して、観光に役立てることが不可欠でしょう。

――という話になると必ず出てくるのが、「いやあ、宇都宮は何もないからなあ」

「歴史って言っても、古いものはあまり残っていないでしょう」などの声です。

確かに、戦後の都市開発の中で、宇都宮は大きく変わりました。その過程で、歴史的なものが失われていったことも事実です。

けれども、よくまわりを見回してみてください。本当に、残っていないでしょうか？

実は、気がつかないだけで、案外いろいろなものがあるのでは？

それを見つける試みが、今回の特集です。といっても、あまり肩ひじ張らず、まさに宇都宮城下を「散歩気分」で歩いてみました。

では、三人と一緒に、歴史散歩をお楽しみください。

1／〔城址公園〕城址公園から散歩がスタート。二人。3／城址公園内の「宇都宮城ものしり館」　2／模型を示しながら話す塙さんと、聞き入る

城址公園

宇都宮氏の祖は、二荒山神社の神主

まずは城址公園からスタートです。城址公園内には、宇都宮城と宇都宮城下の地理・地形が一目で分かる模型が設置されています。その前に立った塙さんが二人に説明を始めると、いつの間にか公園のボランティア・スタッフたちも集まってきて、メモを取り始めました。

塙　宇都宮氏の始まりは、藤原宗円。この人はもともとお坊さんですが、前九年の役（1062年〈康平5〉平安末期）の時に功績があったとして、二荒山神社の神主の長として、ここに落ち着くことになりました。そこで、神社のほぼ真南に館を構えたのですが、それが宇都宮城の始まりです。

ですから、宇都宮城のそもそもの始まりは、戦うためのものではなく、館、つまり住み処だったんですね。これは、後世で言えば二の丸あたりまでの範囲だったようです。

では、いつごろから、戦うための拠点となったのかと言えば、鎌倉時代。その後南北朝、戦国と経るにつれ、館から城へと変わっていきます。戦国時代にはもう、土塁を高くしたり堀を深くしたりと、いわゆる「お城」らしい姿になっていきます。

その後、江戸時代には、城主は二の丸に住み、本丸は将軍が日光参詣に行く際に泊まる御成御殿となっていました。

宇都宮城が焼けたのは、戊辰戦争の時です。城だけでなく、当時の城下町は広く焼けてしまいました。宇都宮に古い建物が少ないのは、この戊辰戦争と、あとは第二次世界大戦の宇都宮大空襲が原因です。

大貫　なるほど、そういう歴史だったから、復元されたこの城址公園も、石垣ではなく土塁なんですね。

塙　そうです、そうです。

大貫　田川は、昔からしばしば氾濫していましたよね。ですから、変な所にお城

史跡と伝説でたどる

宇都宮の歴史

池辺郷と称されたその昔

10世紀に完成した『和名抄』によれば宇都宮は河内郡に属する「池辺郷」と記され、その名の通り葦やヨシがおい繁る沼地のほとりにあったといわれます。このことは現在も使われている池上町、上河原などの地名からも想像することができます。

この池辺郷を舞台とした代表的な昔話の一つにおしどりと猟師の心情を描いた「おしどり塚の伝説」があります。また、奥州平泉に落ちのびた源義経を追って旅を急ぐ静御前が喉を潤したといわれる七木七水八河原のひとつ「亀井の水」や、そのさい二荒山神社に参詣する途中、静御前が手を清めようと湖畔にしゃがんだところ誤って鏡を池の中に落としてしまったという「鏡が池」の伝説が今日に伝えられています。

しかし、七木七水八河原の多くは今はなく、七水は前述した亀井の水のほか、二荒山神社境内の「明神の井」、慈光寺の「天女水」、滝尾神社の「滝の井」が、七木はわずかに県庁と市役所を結ぶシンボルロードと南大通りの交差点に「大銀杏」を残すだけとなりました。

を構えたもんだなと思っていたんです。神主の館としてスタートしたんですね。

福田　だからこんなに近くに、神社とお城があるんですね。

塙　あとで歩く御橋（みはし）通りの、名前の由来になった「御橋」は、もとは城主が神社に行くために渡った橋なのです。

大貫　宇都宮氏はいつまで続いたのでしょうね。確か幕末は戸田氏ですよね？

塙　宇都宮氏は豊臣秀吉に滅ぼされたのです。その理由は、今も定かではないのですが、一つには当時の城主である国綱（くにつな）に跡継ぎがいなかったということ。もう一つは自分の領地を過少申告していたということ。この二つの理由ではないかと考えられています。

大貫さんや福田さんの質問に、よどみなく答える塙さん。参加したお二人だけでなく、ボランティアスタッフも、そしてたまたま来館した二般の人まで、すっかり感心して聞き入っていました。模型の前を離れて城址公園を歩きながら、今度は大貫さんが「うつのみやシティガイド協会」会長らしく、知識を披露します。

大貫　宇都宮の桜と言えば、慈光寺さんのしだれ桜が「宮でいちばん早く咲く桜」として有名でしたよね。でも、城址公園に植えた桜の方が、早咲きの桜なんです。ここにはいろいろな種類の桜が植えられていますから、春を通してずっと桜が楽しめる名所になると思います。

福田　来年から、楽しみですね。

城址公園の周囲に、大谷石の蔵が見えました。宇都宮市内には蔵がいくつもありますが、これらも整備すれば良質な名所になるのでは……とは、三人の一致した意見でした。

城址公園を出て、本丸通りから南大通りへ。

大貫　（交差点で御橋通りを見ながら）ここもまだ、城の中ですか。

塙　そうです。

福田　広いですねえ。

塙　ここまでは本丸通り。あそこから先が御橋通り。本当は表示があるといいんですけどね。

大貫　古い町名表示とかもあるといいですね。

塙　馬場町とか鉄砲町とか曲師町とか、昔の町の名前は歴史と深く結び付いていますから、何らかの形で残しておきたいものです。

二荒山神社

昔も今も、〈宮〉の中心

御橋通りを歩いて、二荒山神社へ向かいます。

塙　戊辰戦争と太平洋戦争、二度の戦災で建物が焼けたと言いました。ただ、建物はなくなっても道は残っているんですね。宇都宮の中心部の道は、昔の道筋や、堀のなごりなんです。そういう意味では、道が歴史をたどる道しるべになっています。

今残っている御橋はもちろん戦後のものです。ただ、形が少し膨らんでいますね。昔の御橋は、太鼓橋だったので、おそらくそれを模しているのでしょう。

福田　御橋を渡ったところに、琴平（ことひら）神社があります。これにも由来があるのですか。

塙　すぐ近くに昔お寺（松岩寺）があり、その境内にあった神社です。

大貫　お寺は、今は無いのですね。

塙　そうですね。この神社だけが残っているのです。本当は橋の向こう、城脇にあったんです。

4

5

4／（二荒山神社）「二荒さん」として親しまれている二荒山神社　5／太鼓橋だった御橋。ここまでが城内です。

ラパーク長崎屋の南側にひっそりと建っている鏡が池の碑。電信柱と、あふれんばかりの自転車に隠れて、ほとんどの人は気がつかずに通り過ぎてしまいます。せっかくの碑が、残念な気がします。

宇都宮パルコの入り口にある下之宮（しものみや）は、二荒山神社発祥の地です。

塙　もともとは、この下之宮が、二荒山神社発祥の地です。なぜ今の位置に遷座したのかというと、荒尾崎（あらおざき）裾部の崩落を避けたのだと思われます。これが838年、平安時代です。以後、ずっとこうしてこの地にあるわけです。

平安時代に全国の有名な神社を記した『延喜式（えんぎしき）』神名帳（じんみょうちょう）という記録があります。その中で、下野には11の有名な神社があ

6

6／小さなこんぴらさん（琴平神社）も、実は由緒正しい（?）歴史の証人。

宇都宮氏と二荒山神社

「宇都宮」という名が歴史上に初めて登場するのは平安時代の終わりのことです。1069年（康平6）に藤原宗円が源頼義（よりよし）に従い、奥州の豪族・安倍頼時（よりとき）を討つため下野に下りました。そして祈禱をこらし平定を成し遂げた功績によって、二荒山神社（宇津宮大明神）の社務職（しゃむしょく）に任じられたのが始まりです。「宇都宮」の語源は二荒山神社の別名「下野一の宮」がしだいに「宇都宮」に転訛したという説があり、三代城主藤原朝綱（ともつな）が宇都宮氏を名乗ったことから地名として定着したものと思われます。

「二荒山神社」は、大和朝廷が成立した第十六代仁徳天皇の時代に下毛野（しもつけの）国（くに）造（みやつこ）に任じられた奈良（ならわけの）別王（きみ）が、この地を平定したと伝えられる崇神天皇の皇子豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）を御祭神に祀ったのが最初と言われています。古くから宇都宮の守り神として信仰されてきました。

宇都宮氏は豊臣秀吉によって、所領を没収されるまで「十二代、1334年の長きにわたり宇都宮城を居城に勢力をふるいました。この時代を代表する文化財として、八代城主宇都宮貞綱（さだつな）が七母十三回忌供養のため東勝寺（廃寺）に建立した全国的にも珍しい「鉄塔婆（てっとうば）」（現・清厳寺／国重文）、同じく東勝寺の梵鐘として時を知らせた「およりの鐘」（現・宝蔵寺）、興禅寺に建立された「宇都宮貞綱、公綱（きんつな）の墓」という五輪塔、十二代城主宇都宮満綱（みつつな）が城内に長楽寺（廃寺）を建立したさい本尊とした銅造阿弥陀如来坐像「汗かき阿弥陀」があります（現・一向寺／国重文）。

本多正純と釣り天井伝説

長かった戦国時代を経て江戸時代に入ると、宇都宮は徳川幕府が整備した五街道の要衝、奥州街道と日光街道の分岐点として「小江戸」と呼ばれる賑わいを見せました。現在も町のあちこちで見ることのできる見通しの悪い筋違いの十字路や曲折した道路などこれらの町割りは「釣り天井の伝説」で有名な二十八代城主本多正純（ほんだまさずみ）が行った城下整備が原形となっているものです。

釣り天井の伝説は、正純が二代将軍秀忠（ひでただ）の不興・不信を買い、突然、出羽国（秋田県）由利五万五千石へ所替を命じられたことが憶測を呼び生れたものと思われます。

その理由として、前城主奥平忠昌（ただまさ）の祖母加納殿（亀姫）が正純の出世を妬み秀忠に架空の"正純謀叛"をデッチ上げ密訴を行ったことや、正純が宇都宮城二の丸・三の丸の改築を幕府に申し立てながら本丸の石垣を改築したこと、改築に反抗した根来同心を斬り捨てたことなどが挙げられています。

宇都宮藩の城主は頻繁に交代しましたが、1710年（宝永7）戸田忠真（ただまさ）が越後国（新潟県）高田から入部し、その後、松平氏二代を経て1774年（安永3）、戸田忠寛（ただひろ）が肥前国（長崎県）島原より入部し、幕末の忠友まで戸田氏の藩政が行われました。戸田氏の墓所である「英厳寺跡」には、「宇都宮候忠烈戸田公の墓」と記した戸田忠恕（ただくみ）の墓の他、戸田氏代々の城主を記した墓碑が建立されています。

り、そのトップが二荒山神社となっています。トップ、すなわち「一の宮」で、これが宇都宮の語源という説もあります。

福田　神社の鳥居も新しくなりましたね。

塙　この鳥居は「両部づくり」と言います。普通の鳥居は足が2本ですが、これはその足をさらに補強するような形になっています。

大貫　堂々とした、いい形ですね。

二荒山神社は、多くの武将・名将たちからも崇拝された神社だったそうです。取材の日は、ちょうど七五三。子供たちもきっと健やかに成長することでしょう。

塙　藤原秀郷も源義家も、鎌倉幕府を開いた源頼朝も参拝しています。武将たちが非常に崇拝していたんですね。しかも本殿には徳川家康が奉納した擬宝珠があります。

大貫　天下をとった武将がみな、参拝しているんですね。武将たちにとっては、特別な神社なんですね。

塙　別格です。天皇家につながっていますから。

福田　それで菊のご紋が使われているんですね。

塙　この社殿も、戊辰戦争で焼けてしまったんですよ。今あるのは明治10年に建てられたもの。仮社殿として再建されたのですが、百年の年月を経て、風格が出ています。

参拝を済ませた皆さんは、ゴールの赤門を目指します。

7／（二荒山神社）楽しそうに歴史談義に花を咲かせる三人。

8／新しくなった鳥居の堂々たる姿。

9／お堀跡に沿った道の曲がり具合が歴史を語ります。

慈光寺

復興なった赤門、宮の新名所

赤門通りを北上して、慈光寺へ向かいます。

慈光寺と言えば、最近ではやはり有名なのは桜と赤門でしょう。城址公園でも触れましたが、宇都宮でもっとも早く咲くと言われる彼岸桜は、一時期樹勢が衰えて心配されましたが、樹木医の治療によってようやく元気を取り戻しつつあります。

塙　赤門通りは、慈光寺の門前町です。これを「赤門」と呼ぶのは、それだけ慈光寺の赤門が印象的だったからでしょう。

赤門は安永4年（1775）に枝源五郎が宇都宮城下の人々から寄付を集めて、同7年に寄進したものです。長く愛されて来たのですが、宇都宮大空襲で焼けてしまい、長く名前だけが残っていました。

慈光寺には、その枝源五郎の墓も残っていますが、おもしろいことにこれは本人が江戸に出る前に建てたものです。

また、縣六石の墓もあります。

枝源五郎は幕末の有名な侠客で、後に江戸に出てその名を上げました。目明しをしていた時期もあったそうです。

10／（慈光寺）完成したばかりの赤門を見ながら「楽しい散歩でしたね」と語り合う三人。　11／有名な彼岸桜。春は見事な花を咲かせます。

縣六石は、これも幕末の思想家。大橋訥菴の弟子で、吉田松陰などともつながりがある人です。

大貫　宇都宮にはいろいろおもしろい人がいたんですね。そういえば、二荒山神社の手水鉢も枝源五郎の寄進ということですが。

塙　天明5年（1785）に寄進されたものです。宇都宮が多士済々であることは確かです。

慈光寺は永正13年（1516）に、当時の城主である宇都宮成綱が開基した浄土宗の寺です。宇都宮城から鬼門の方角にあるため、鬼門固めの役割も果たしていたと言われています。いわば、守りの寺であり、重要な役割を担っていました。

福田　赤門が復興になって、ようやく通りの名前の由来がはっきりしましたね。

大貫　今までは何で「赤門通り」なのか、若い人にはさっぱりだったでしょう。こうしたことから、歴史に興味を持ってもらえると、ありがたいですね。

天候にも恵まれ、今回の歴史散歩は無事に終了。城址公園から慈光寺まで、ただ歩けばほんの20分程度の道のりですが、歴史をたどりながら約2時間をかけて回る、楽しい体験でした。

最後に皆様のご感想の言葉をいただきました。

大貫　今日は塙さんと一緒に歩けて、私がいちばん楽しんだに違いないと思っています。その「楽しんだ」ことを、今度はぜひ市民の皆様にも体験していただきたい。ぜひ、宇都宮を、多くの人に歩いていただきたいと思います。

福田　以前、女性部で塙さんにご講演いただいたことがあったのですが、その時は残念ながら参加できませんでした。今回ご一緒させていただいたのは、とてもありがたいことだなと思います。まずは住んでいる人がきちんと意識を持って、分かっていないといけないんだなと感じました。まずは女性部から、きちんと勉強させていただきたいと思います。そしてそれを、子供たちやお客様にお伝えしていきたいと思います。

塙　宇都宮は、いろんな見学する場所が、実は多いのです。課題は、それらにいかに関心を持っていただくかということ。その意味で、今日は城址公園から二荒山神社、そして慈光寺というコースでしたが、それ以外にもたくさん見ていただきたい、知っていただきたいところがありますので、今後も誌面で企画して、ぜひPRしてください。

いかがでしたか？　これは宇都宮の魅力の、ほんの一部。他にもさまざまな見どころが、たくさんあります。

皆さんもぜひ街の魅力を再発見し、それを多くの人に伝えてください。都市観光は、そこからスタートするのです。

12／生前に自分で建てた、枝源五郎の墓。逆修墓（ぎゃくしゅぼ）と言うそうです。

宇都宮の偉人 蒲生君平

亀ヶ岡城と呼ばれ通算十一家、四十七代の城主が居住した名城宇都宮城は、明治維新期に起きた戊辰戦争で焼失し、その後の堀の埋め立てなどにより城の姿は完全になくなりました。しかし、宇都宮城を復元しようという気運が高まり、二〇〇七年（平成19）3月「宇都宮城址公園」として城の一部が復元整備され、新たな宇都宮のシンボルが誕生しました。

また、戊辰戦争で犠牲になった新政府軍の戦死者の墓である「薩摩藩戦死者の墓」が報恩寺（西原一丁目）の境内に、旧幕府軍の戦死者の墓「戊辰の役戦士の墓」が激戦地であった六道の辻に、「彰義隊殉士の墓」が常念寺（花房一丁目）に建立されています。

この時代、宇都宮を代表する偉人として蒲生君平を挙げることができます。宇都宮城下新石町（小幡二丁目）に生まれ、勤王家高山彦九郎、『海国兵談』などを著した林子平と共に「寛政の三奇人」と呼ばれ、近畿の歴代天皇陵を調査した『山陵志』を残しました。その業績を讃える「蒲生君平勅旌碑」が、1869年（明治2）明治天皇の命により宇都宮への入り口である南新町（花房三丁目）に建立されました。

このほかにも宇都宮には善願寺（南大通り）丁目）の「大豆三粒の金仏」や大谷石造りの「松が峰教会」（松が峰二丁目）など歴史を秘めた、たくさんの文化財、史跡が点在しています。これらの歴史をひとつひとつ紐解いていくなら、他県から宇都宮を訪れた人々に、自信を持って「わがまち宇都宮」を紹介できるのではないでしょうか。